

1-6					
主題		認知症地域支援推進委員会の2年間のあゆみ			
副題		～前を向いて出会いつながる支援を目指して～			
キーワード 1	認知症地域支援推進員	キーワード 2	本人ミーティング	研究(実践)期間	24ヶ月

法人名・事業所名	社福) 奉優会 港区地域包括支援センター白金の森				
発表者(職種)	岩城澄恵(保健師)				
共同研究(実践)者	社福) 奉優会 認知症地域支援推進委員会メンバー16人				

電話	03-5724-8030	FAX	03-3715-1076		
----	--------------	-----	--------------	--	--

事業所紹介	港区地域包括支援センター白金の森は、人口23万人の港区にある5包括の一つ。港区の南側に位置し、高齢者人口約1万2千人を対象に支援を行う地域包括支援センター。総合相談対応、介護予防事業、認知症事業、権利擁護事業等を行い、毎月の相談件数は1400件を超える。				
-------	---	--	--	--	--

<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>認知症を患う人の数が2025年には700万人を超えると推計、65歳以上の高齢者のうち、5人に1人が認知症に罹患する予想されている。その認知症の方々は、普段どこの場所で過ごされているのでしょうか？認知症高齢者の居場所として認知症高齢者の約半数の方は、自宅で過ごされていることがわかっている。今後益々多くの認知症高齢者が地域の中で過ごされることになる。</li> </ul> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>認知症の方々が増加する将来を見据え、本人の意欲向上及び家族の介護負担感の軽減と、家族関係の再構築などを図る等認知症地域支援推進員(以下推進員)の役割は大きいと考え、下記仮説を立てた。</li> </ul> <p>①10地区16包括の認知症地域支援推進員の横の繋がりの強化を図ることで、推進員自身の孤立や事業の偏りを防ぎ、認知症ご本人の声を聞き、よりご本人に寄り添った支援が行なえるのではないかと。</p> <p>《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>社会福祉法人奉優会の地域包括支援事業部では、令和4年度4月～認知症地域支援推進委員会を立ち上げ、16か所の地域包括支援センターに所属する認知症地域支援推進員16名をメンバーとし、令和4年度委員会を年4回開催した。そして、先駆的な取組や事業開催方法を共有し、初めての推進員でも認知症事業の知識を増やし企画運営ができるよう、アドバイスや資料の情報提供や見学、助言等後方支援を積極的に行った。令和5年度の推進委員会では、全センターでの本人ミーティング開催を目標に委員会メンバーで、本人ミーティング開催の勉強会、先駆的に取り組んでいるセンターからの成功事例紹介、意見交換を行い、横の繋がりの強化に務めた。</li> </ul> <p>《4. 取り組みの結果》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>令和4年度には8包括16回の本人ミーティングの開催回数だったが、令和5年度では10包括合計</li> </ul>					
---	--	--	--	--	--

37 回の開催にまで広げることができた。委員会での意見交換が参考となり、認知症ご本人が集うミーティングのチラシのネーミングや色彩、認知症ご本人にも興味を持っていただけるよう、伝え方にも工夫を凝らし作成することができた。令和 4 年度ではあまり取組みのなかった認知症「チームオレンジ」の開催についても、令和 5 年度力を入れ取組を行うことができた。結果、認知症と思われる本人やそのご家族を初期の段階からチームでサポートする「チームオレンジ」サロン開催については令和 4 年度では、6 包括で実施され合計 68 回の開催であったが、令和 5 年では、1 年間 6 包括、計 50 回の開催となり、こちらでも今年度開催予定のセンターも複数あることから、全体の開催回数は今後さらに増えることが予想されている。認知症ご本人の意見を取り入れた事業の展開ができるような機会が年々増えてきたと言える。

### 《5. 考察、まとめ》

今後益々認知症高齢者の方々が地域の中で増えていくことが予測されており、認知症になっても住み慣れた地域で近隣の住民の方々と楽しく過ごしていただくためには、日頃から近隣住民同士の声のかけ合いや助け合いが必要不可欠である。そのため近隣の方々に認知症を正しく理解していただき、認知症の人へのやさしい声掛けや少しの助け合いが必要と思われる。今回地域包括職員やケアマネジャーとしか話し相手がいなかった方が、カフェやチームオレンジのサロン等にお声かけし参加されることで、近隣の方に自分が認知症であることを自ら話せたり、相談する機会となった。また、本人ミーティングに参加された認知症のご本人達が、自分の意見を話せたことで「初めて生きていると感ずることが出来た」と話されたこともあった。近隣ではあったが接点がなく話す機会が無かった方同士が、本人ミーティングに参加したことで、災害時お互いに声をかけ合おう、助け合おうと相談されていたり、認知症の方同士が支え合う機会ともなったと言え、本人ミーティングの開催の効果は高いと思われる。各包括の推進員が委員会で情報交換や勉強会で学んだことを地域に活かし展開することで、今まで以上に推進員の活動の幅は広がると考えられる。今後は全包括でのチームオレンジ開催を目標に、地域の多世代の方々に今まで以上に認知症の理解を深めていただき、推進員を中心に災害時や緊急事態が発生しても近隣住民同士、声を掛け合え助け合える仲間づくりを積極的に行っていきたいと考える。

### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

### 《7. 参考文献》

- ・認知症施策の動向について(認知症施策推進大綱等)厚生労働省老健局認知症施策推進室井上宏氏
- ・厚生労働省ホームページ 認知症施策 | 厚生労働省 ([mhlw.go.jp](http://mhlw.go.jp))
- ・新オレンジプラン 認知症施策 厚生労働省ホームページ
- ・本人ミーティングとは / チームオレンジとは 厚生労働省ホームページ

### 《8. 提案と発信》

・日本の将来の人口動態統計上を見ても人口が減少しているにも関わらず後期高齢者の人口は増えており、必然的に今後介護を担う若者が減少し、助けてもらいたくても助けてもらえない状況が今後出現することが予想される。そのため、今後増えると予想されている独居認知症高齢者の方が、いつまでも住み慣れた地域で暮らしていくためには、高齢者自らが普段から近隣住民と顔の見える関係性の構築に努めることで、高齢者自身の脳機能の維持や筋力低下予防につながることは必然であり、そのための居場所づくりや自主グループの立ち上げ支援が今急務であると考えます。またそのしくみづくりを起動する推進員同士が孤立せず、お互いに励まし合い、学べる機会が身近にあることが重要であると考えます。